東京外国語大学文書館　第5回企画展

外語とボート

The History of Rowing in the TUFS

―学内競漕大会第百回記念―

監修：東京外語艇友会

展示期間：**2013年5/22(水)→8月上旬**

場　　所：**附属図書館１階ギャラリー**

学内競漕大会の歴史 —100回までの軌跡—

本学の年中行事の一つ学内競漕大会は
1902年(明治35)に始まり、今年で第100回を迎えます。
ここでは、100回に至るまでの軌跡を追います。

学内競漕大会の興り

第1回学内競漕大会は、1902年(明治35)秋に開催された。東洋組(清・韓)と西洋組(英・仏・独・露・西・伊)に分かれた選手たちは、固定席艇(6人漕ぎ)に乗り接戦を繰り広げた。翌年の第2回大会後、競漕大会は「Foreign Languages School」の頭文字をとり、F組(英・仏・独)、L組(露・西・伊)、S組(清・韓)の三組対抗レースに改められた。

1907年の第6回大会の際には、第一選手レースの覇者に贈る大優勝旗が作製され、学内の重要な年中行事の一つとして発展してゆく。

明治・大正・昭和初期の競漕大会の様子

明治・大正期の競漕大会は主として秋季に、F・L・S対抗の第一選手レース・第二選手レースが実施されていた。しかし、1923年(大正12)からは春季に開催されるようになり、春季大会では第一選手レースに加え、「一年級分科レース」が開催されるようになった。この一年級分科レースが翌年から、F・L・S三組の1年生対抗レース「覇業レース」と名称を変え、校内レースの花形となってゆく。他方、第二選手レースは秋季小会で継続され、この秋季小会には、1935年(昭和10)から、校長盃を巡り各学年各学部が競う「國際端艇漕艇會」が開催された。第1回校長盃は支那語3年生が優勝した。

F・L・Sの各組は覇業レースの覇を競った。上級生は入学式前の3月からコーチ、マネージャーの選抜に入り、入学直後から、新入生は猛特訓を受けた。また、1908年(明治41)頃からは、新入生の特訓の為、江戸川を遠漕する2泊3日のボート合宿なども実施された(4頁「遠漕」の項、参照)。

こうして全学的な学内競漕大会の中で活躍した者の多くが端艇部の正選手となった。

戦時下の競漕大会の様子

戦時下においても学内競漕大会は継続された。学生たちは「非常時下学生たる本分にそむかない」ことを標語に活動し、松戸への遠漕も敢行した。また、戸田漕艇場の竣工後(1940年)の第40回大会(1942年)からは会場を戸田コースに移し開催された。

1943年5月23日第41回大会を最後に、大会は1951年まで一時中断された。同年、東京外國語學校から多くの学生が「学徒出陣」にとして戦地に赴いた。

トピック　学内競漕大会前史

日本最初の学内競漕大会は、1887年(明治20)4月16日に東京帝国大学で、同年11月に高等商業学校で実施された。そして、東京外國語學校が高等商業学校から独立する以前の1897年11月13日、高等商業学校の秋季端艇競漕会に、附属外國語學校の学生が3組参加し、うち1組が1位になった。

トピック　艇のハイカラな名称!?

他校が「養老」、「青龍」などの名称を所有する艇に付ける中、外語では「ジュピター」・「アポロ」・「マルス」の名称が使われた。

トピック　F・L・S　3組の再編

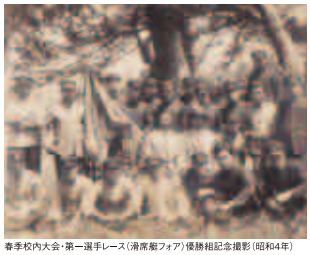
明治・大正期には語学科の増設に伴い、FLSの組分けが再編された。
F組:英・仏・独
L組:露・西・伊・葡・馬(馬来語)・印(印度語)
S組:中・蒙・韓(1918年廃止)

トピック　東京年中行事

隅田川の端艇競漕は外語だけでなく、東京中を沸かす年中行事の一つであった。昭和9年『コンコルディア』(第11号)には「その昔萬都の子女を熱狂せしめた櫻の土堤を人で埋めた外語のボートレースは東都の都の花に付物の年中行事であった」とある。

トピック　戦前唯一の中止

学内競漕大会は日露戦争が開始した1904年も開催された。しかし、明治天皇崩御の1912年(明治45・大正元)のみ実施されなかった。



春季校内大会・第一選手レース(滑席艇フォア)優勝組記念撮影(昭和4年)

春季校内大会・各組応援団(昭和4年)

覇業練習・松戸遠漕(昭和3年)

覇業レースのスタート(昭和16年)

戦前の学内漕艇大会 —昭和12年大会—

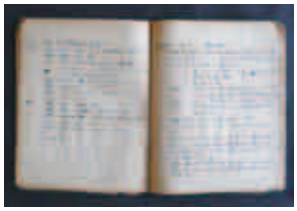
当時の資料から戦前の学内競漕大会の様子を見てみよう。1937年5月1日発行の『コンコルディア』(第19号、端艇部機関紙)では、大会前からの各組の激戦の模様が紹介されている。「恒例の外語名物校内漕艇大會も餘すー月足らずの五月九日(日)向島商大艇庫に於て華々しく挙行される事となつたが去る四月十二日始業式終るやF・L・Sの各組コーチャーマネーヂャー等々眼色變へてクルー蒐集に奔走、今年こそは我々の手で覇権を握らんと今や前奏戦の最高潮‼ 暗々の中に早くも激戦が演じられて居る。」また、当時の端艇部の練習日誌では、入学式2日後の4月14日には第一選手、覇業選手の選手が練習のために艇庫を訪れたことや、5月1日には大会前の訓練として松戸に遠漕したことが記述されている。その他、日誌には職員の遠漕も記載され、当時のボート人気が学生・職員ともに全学的広がりを持っていたことが分かる。

この年の学内競漕大会には500名余りの参加者が集まり大盛況に終わった。なお1937年の在籍者数は1872名であり、この500名に教職員が含まれていたことを考慮しても、全校生徒の4分の1強が参加していたことになる。

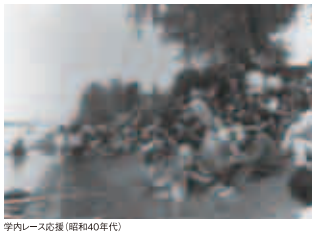
春季校内大会・各組応援団(昭和4年)

■ 練習日誌(『コンコルディア』第20号〔昭和12年7月3日〕)

3月16日　本日より三日間入学試験。人才捜し出す可く、活動を開始す。
3月23日　エイト・メンバーを揃へて春季合宿を開始す。クリンカー・エイト出艇今日數日間は之を行ふ。
3月27日　本日より午前シェル、午後クリンカーとす。
4月　3日　職員團遠漕に出發。(因みに歸路は艇を置いて陸路を歸り、對抗クルー乗り次いで艇を漕ぎ歸り、長練習に當てる筈)クリンカーにて赤羽廻漕、赤羽橋上流にて猛練習を行ふ
4月　4日　本日よりシェル・エイトのみとす。
4月　5日　職員遠漕團に乗り継ぐ可く、柴又に行く。雲雀を聴き、堤の櫻を賞しつゝ歸る。
4月10日　本合宿最初のモーター付き練習。未だ可成りローリングあり。(以後、土曜、日曜は必ずモーター付きとしその他の日も出来る限りさうする事。大體に於て實行した)
4月12日　入學式、新入生の勧誘に多忙。
4月14日　第一、覇業選手共に河へ爲めに艇庫
4月16日　賑ふ。大會の準備に多忙。
この頃よりローリングなくなる。
4月29日　早慶レガツタ観戦。
5月　1日　覇業松戸遠漕に出發。神戸の永田先輩来られ、遠漕に参加さる
5月　2日　猛烈なる雨に逢ひびしよ濡になつて歸る。
5月　5日　大倉高商より對抗レースを拒絶し来る
5月　7日　明大に試合申込みを爲し快諾を得。
5月　9日　第三十五回校内大會。



学内レース・エイト・デモンストレーション（昭和35年）


学内レース応援（昭和40年代）

学内競漕大会（1967年）

学内レガッタ（平成15年）

戦後の学内競漕大会の復活

1951年、1943年第41回より中断していた校内レースが「戦後第1回」と銘打って復活した。6月24日に開催されたレースには、学生100名が参加し、15レースが挙行された。しかしながら、この大会は戦後の混乱の中開催されたためか戦前からの通算開催回数を引継いでおらず、この大会から2年後の1953年6月の戦後第2回大会が第42回大会とされている。

第42回大会では覇業レースが、F・L・Sの3組対抗から各部対抗レースに転換され、優勝クルーには宮越健太郎元教授寄贈の朱塗り「宮越杯」が贈られた。参加クルーは50組、250名に及んだ。そして新制大学になり出現した女子学生の参加も見られ、大会は年々華やかさを増してゆく。

学生数の増加に伴い、大会への参加者も増大する。第53回大会(1965年)からは大会前の三回以上の試漕が各クルーに義務付けられ、翌年の第54回大会からはレースが体育の必須単位となった(当時)。また、戦後の大会では覇業レースのほかに、一般レース、職員レース等が実施され、第56回大会からはOBレースも開催されている。

学園紛争による中断

1969年、前年の夏から始まった学園紛争のため、競漕大会は一時中止された。1年以上の空白期を経て、1970年9月26日、競漕大会は再開された。前年の中止の影響により、1・2年生のほとんどがボートを知らなかったことから、成功が不安視されたというが、約120クルー、600名の参加者をもって盛況のうちに終った。

戦後の女子学生の増加と競漕大会

東京外国語大学では学生数全体に占める女子学生の比率が徐々に上昇してゆく。これに伴い男子学生中心の覇業レースをメインレースとする大会への参加者数の減少傾向も見られた。これに対処するため、第85回大会からは「女子覇業レース」が導入された。この大会には127クルー(前年96クルー)がエントリーし、競漕大会は再度活気を取り戻してゆく。

こうして、学内競漕大会は本学に欠かせない年中行事の一つとして今日まで継続して実施されてきた。

参加賞 昭和初期から学内競漕大会ではメダル、ピンバッチ、タオルなどの参加賞が配布されるようになった。

校内大会参加メダル（昭和初期）

第44回学内競漕大会参加賞

第76回学内競漕大会参加賞（1989年）

学内競漕大会年表

戦前（1回～41回）

西暦	和暦	階数	日付	第一選手優勝組	覇業優勝組	備考
1902年度	明治35年度	第 1回	秋	不明		
1903年度	明治36年度	第 2回	春	不明		
1904年度	明治37年度	第 3回	11月6日	L組		
1905年度	明治38年度	第 4回	4月15日	不明		大優勝旗の製作
1906年度	明治39年度	第 5回	4月13日	F組		
1907年度	明治40年度	第 6回	10月12日	S組		
1908年度	明治41年度	第 7回	10月18日	S組		
1909年度	明治42年度	第 8回	10月30日	S組		
1910年度	明治43年度	第 9回	4月24日	S組		
1911年度	明治44年度	第10回	10月17日	S組		
1912年度	明治45年(大正元年)度		天皇崩御のため中止			
1913年度	大正 2年度	第11回	不　明	不明		
1914年度	大正 3年度	第12回	10月11日	S組		
1915年度	大正 4年度	第13回	10月10日	F組		
1916年度	大正 5年度	第14回	不　明	F組		
1917年度	大正 6年度	第15回	不　明	F組		
1918年度	大正 7年度	第16回	10月17日	F組		
1919年度	大正 8年度	第17回	10月17日	F組		インターカレッジ前哨戦(東大主催の対校レース)実施
1920年度	大正 9年度	第18回	9月26日	L組		日本漕艇協会設立、第一回関東大学専門学校選手権競漕大会(インターカレッジ)開催(外語は未参加)
1921年度	大正10年度	第19回	9月25日	S組		第二回関東大学専門学校競漕大会(外語は始めて参加)
1922年度	大正11年度	第20回	10月17日	S組		
1923年度	大正12年度	第21回	5月12日	S組	L組	覇業レース前哨戦にあたる一年級分科レース開催 大震災のため対校レース中止
1924年度	大正13年度	第22回	5月31日	F組	F組	覇業レース開始
1925年度	大正14年度	第23回	5月16日	F組	S組	
1926年度	大正15年(昭和元年)度	第24回	5月22日	L組	S組	
1927年度	昭和 2年度	第25回	5月21日	F組	S組	
1928年度	昭和 3年度	第26回	5月19日	L組	S組	
1929年度	昭和 4年度	第27回	5月25日	S組	L組	
1930年度	昭和 5年度	第28回	5月10日	L組	S組	
1931年度	昭和 6年度	第29回	5月23日	S組	S組	東京外語艇友会の発足
1932年度	昭和 7年度	第30回	5月15日	L組	S組	
1933年度	昭和 8年度	第31回	5月 6日	S組	L組	
1934年度	昭和 9年度	第32回	5月13日	F組	L組	
1935年度	昭和10年度	第33回	5月19日	L組	S組	校長杯争奪国際戦の開始
1936年度	昭和11年度	第34回	5月10日	S組	S組	
1937年度	昭和12年度	第35回	5月 9日	F組	L組	
1938年度	昭和13年度	第36回	5月 8日	F組B	F組	全日本選手権舵手付ペア優勝
1939年度	昭和14年度	第37回	5月14日	F組	S組	
1940年度	昭和15年度	第38回	5月12日	F組	S組	
1941年度	昭和16年度	第39回	5月11日		L組	第一選手中止
1942年度	昭和17年度	第40回	5月 3日		S組	戸田コースで初開催
1943年度	昭和18年度	第41回	5月23日		L組	

戦後（42回～100回）

西暦	和暦	階数	日付	覇業優勝 男子	覇業優勝 女子	備考
1951年度	昭和26年度		不　明			復活第一回
1952年度	昭和27年度					
1953年度	昭和28年度	第42回	6月14日			
1954年度	昭和29年度	第43回		第七回(インドネシア、オランダ国)		
1955年度	昭和30年度					
1956年度	昭和31年度	第44回	6月17日			
1957年度	昭和32年度	第45回	6月16日			
1958年度	昭和33年度	第46回	6月29日	中国語		外語創立六十周年記念
1959年度	昭和34年度	第47回	6月14日	中国語		
1960年度	昭和35年度	第48回	6月12日	ポルトガル語		
1961年度	昭和36年度	第49回	6月11日			
1962年度	昭和37年度	第50回	7月 8日	英米科		
1963年度	昭和38年度	第51回				
1964年度	昭和39年度	第52回				
1965年度	昭和40年度	第53回	6月19日	ロシア科		
1966年度	昭和41年度	第54回	6月18日			
1967年度	昭和42年度	第55回	6月17日	ドイツ科		
1968年度	昭和43年度	第56回	6月29日	ドイツ科		
1969年度	昭和44年度			学園紛争のため中止		
1970年度	昭和45年度	第57回	9月26日	アラビア科		
1971年度	昭和46年度	第58回	10月20日	インドネシア科		
1972年度	昭和47年度	第59回	5月17日	ロシヤ科		
1973年度	昭和48年度	第60回	6月13日			
1974年度	昭和49年度	第61回	7月 3日	中国語学科		
1975年度	昭和50年度	第62回	6月25日			
1976年度	昭和51年度	第63回	6月26日	ドイツ科		
1977年度	昭和52年度	第64回	5月25日	インドネシア科		
1978年度	昭和53年度	第65回	5月24日	インドシナ科		
1979年度	昭和54年度	第66回	6月20日	フランス科		
1980年度	昭和55年度	第67回	6月25日	ポルトガル・ブラジル語学科		
1981年度	昭和56年度	第68回	6月10日	フランス科		
1982年度	昭和57年度	第69回	6月 9日	中国語学科		
1983年度	昭和58年度	第70回	5月15日	インドネシア語学科		
1984年度	昭和59年度	第71回	6月27日	中国語学科		
1985年度	昭和60年度	第72回	不　明	ドイツ語学科		
1986年度	昭和61年度	第73回	6月 4日	中国語学科		
1987年度	昭和62年度	第74回	5月27日	ポルトガル・ブラジル語学科		
1988年度	昭和63年度	第75回	6月 1日			
1989年度	昭和64年度・平成元年	第76回	5月24日	ベトナム語科		
1990年度	平成 2年度	第77回	5月23日	タイ科		
1991年度	平成 3年度	第78回	5月22日			
1992年度	平成 4年度	第79回	5月20日			
1993年度	平成 5年度	第80回	5月19日	インドネシア語学科		
1994年度	平成 6年度	第81回	5月25日	ドイツ語学科		
1995年度	平成 7年度	第82回	5月24日	インドネシア語専横		
1996年度	平成 8年度	第83回	5月22日			
1997年度	平成 9年度	第84回	5月21日	中国語専攻		
1998年度	平成10年度	第85回	5月27日	モンゴル語専攻	ビルマ語専攻	女子覇業の開始
1999年度	平成11年度	第86回	5月26日	ロシア語専攻	モンゴル語専攻	独立百周年(建学126年)記念
2000年度	平成12年度	第87回	5月24日	英米語専攻	フランス語専攻	西ヶ原最後の大会
2001年度	平成13年度	第88回	5月23日	英語専攻	ウルドゥー語専攻	
2002年度	平成14年度	第89回	5月15日			
2003年度	平成15年度	第90回	5月21日			
2004年度	平成16年度	第91回	5月12日			
2005年度	平成17年度	第92回	5月18日			
2006年度	平成18年度	第93回	5月17日	イタリア語科	中国語科	
2007年度	平成19年度	第94回	5月18日			
2008年度	平成20年度	第95回	5月28日			
2009年度	平成21年度	第96回				
2010年度	平成22年度	第97回				
2011年度	平成23年度	第98回	6月 1日			
2012年度	平成24年度	第99回	5月30日			
2013年度	平成25年度	第100回	5月29日			

外語とボート

今年、第100回を迎えた学内競漕大会に代表されるように、
外語とボート競技には浅からぬつながりがある。
外語にボート競技が伝わったのは、
まさに日本の学生ボート競技の黎明期であった。

対東京高工戦クルー。後列左より、坂本嘉平治・石井壽郎・永原輝雄・松井登・大内義見　前列同、宮岡榮一・平田徳次郎・宮越健太朗・田代光雄・佐藤恒雄（大正8年）

ボート黎明期

1875年(明治8)、イギリスから来日したフレデリック・ウィリアム・ストレンジは、東京英語學校で英語講師をするかたわら、学生にボート競技を伝えた。彼が着任した東京英語學校は、前年に東京外國語學校(1873-85年)英語科が分離独立した学校であり、この時期に東京外國語學校の学生たちも彼からボートを学んだと見られる。

1885年、東京外國語學校は統合により一時廃校となるが、学生に普及したボート競技は統合された東京商業学校に受け継がれ、高等商業学校(東京商業学校が改称)では1887(明治20)からは学内競漕大会も開催された。その後、本学が1897年に高等商業学校に附属外國語學校として創立、1899年に独立する中で、ボート競技は外語に再興され、独立翌年には端艇部が設立された。

対校エイト（大正10年）

トピック　フレデリック・ウィリアム・ストレンジ

フレデリック・ウィリアム・ストレンジ（1853年10月29日～1888年4月27日(享年34歳)
21歳で来日した彼はボート競技だけでなく、運動会・スポーツマンシップなど近代スポーツの精神を日本に伝えた。

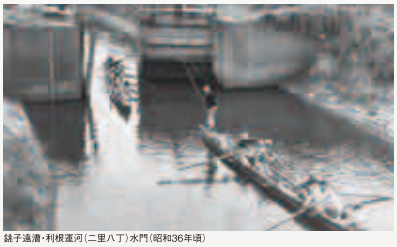
トピック　運動部

第一部：弓術、撃剣、柔道
第二部：「ロンテニス」、「ベースボール」、「フートボール」
第三部：水泳、端艇
第四部：陸上運動會

遠　漕

遠漕は、特訓であると同時に、道中を楽しむ「遠足」の意味合いを持っていた。外語では1908(明治41)頃には実施され、学内競漕大会のF・L・Sの各組は毎年一度、レース前の最後の仕上げに江戸川の柴又までの2泊3日または荒川の戸田橋までの1泊2日の道のりを旅した。

大正期に入ると、端艇部では千葉の銚子までの遠漕が行われた。銚子遠漕を最初に始めた学校は東京高等商業學校であり、1898年(明治31)に実施された。全5～9泊に及ぶ道中は時に天候の変化に悩まされる厳しい道のりであったが、時には先輩も参加し、思い出の残る旅路となったといい、平成になっても実施されてゆく。



銚子遠漕・利根運河（二里八丁）水門（昭和36年頃）

教授遠漕

銚子遠漕（平成4年）

■ 遠漕の思い出～第63回学内競漕大会プログラム

大学でのボート生活をいろどるものの一つに遠漕がある。楽しくもあり苦しくもあるが、この遠漕で、1日に10時間余りを漕ぎまくる。休息は1時間に1回で10分位。このようにして1週間近くかかって、戸田から銚子の少し手前の牛堀というところまでを往復するのである。

「遠漕なくしてはボートは語れない。」と言われるように、ハゲのじいさんになっても良い思い出として心に残る。外語遠漕歌の一節をひとつ　かつ然として開けゆく大利根の天地三千里
歌詞につくせぬ感激をオールの響に君よ開け。

■ 大利根遠漕

日程	旅　程
第１日	向島艇庫→堅川運河→ →行徳→市川→松戸(泊)
第２日	松戸→流山→利根運河(二里八丁)→ →取手→布佐→木下(泊)
第３日	木下→安食→神崎→佐原(泊)
第４日	銚子(滞在)
第５日	佐原→小見川→宝山→銚子(泊)
第６日	銚子滞在
第７日	銚子→佐原(泊)
第８日	佐原→布佐(泊)
第９日	布佐→柴又(泊)
第10日	柴又→向島艇庫

大利根遠漕コース略図
現在の距離にして約143kmある。

遠漕歌

銚子遠漕数歌

一つ出たわいの　ヨサホイノホイ　人も許せば我も又　ホイ　許す外語のボートマン　ホイノホイ
二つ出たわいの　ヨサホイノホイ　艇を出て行く白髭を　ホイ　向う十日の腕試し　ホイノホイ
三つ出たわいの　ヨサホイノホイ　都鳥にもしばらくの　ホイ　別れを告げよか運河口　ホイノホイ
四つ出たわいの　ヨサホイノホイ　呼べば答える行徳を　ホイ　右に数えて二千本　ホイノホイ
五つ出たわいの　ヨサホイノホイ　何時も昔の偲ばるる　ホイ　緑したたる国府台　ホイノホイ
六つ出たわいの　ヨサホイノホイ　むせぶ松戸の朝霧に　ホイ　黒い腕が十二本　ホイノホイ
七つ出たわいの　ヨサホイノホイ　涙流すな流山　ホイ　ノーストップで運河まで　ホイノホイ
八つ出たわいの　ヨサホイノホイ　山は筑波嶺河は利根　ホイ　漕ぐは外語のボートマン　ホイノホイ
九つ出たわいの　ヨサホイノホイ　漕ぐ手休めて眺め入る　ホイ　潮来出島の夕景色　ホイノホイ
十と出たわいの　ヨサホイノホイ　遠い旅路も恙なく　ホイ　今宵大新で飲み明す　ホイノホイ

端艇部の創設と学校対抗レースの開始

独立後の1899年(明治32)12月9日、在校生組織の同窓会は「校友會」とその名称を改め、文芸・運動の二部が発足した。運動部は第1部～第4部で構成され、端艇は「水泳」とともに第三部を為した。当初、端艇部の活動は学内競漕大会や他大学の招待レースへの参加に限られていたが、大正期に入り学校対抗のレースが開始されると、学校の代表としてレースに臨んだ。

1919年(大正8)、インターカレッジ選手権開催を提唱する東京帝国大学主催の招待レースが開催され、東京外國語学校は東京高等工業学校との対校戦を行った。翌年、東京帝国大学により、漕艇統轄団体の組織化、選手権競漕大会の開催などが提唱されると、各校はこれに応じ、ここに日本漕艇協会が設立された。この協会設立校の7校の一つに本学はその名を連ね、日本漕艇協会はその後「関東大学専門学校選手権大会」(インターカレッジ)を開催してゆく。

トピック　日本漕艇協会と宮越教授

日本漕艇協会は、國際競漕への進出をめざし組織化された。1919年(大正8)5月神田・多賀羅亭で開かれた第1回会合には、外語から田代光雄端艇部長の代理として宮越健太郎教授らが出席した。設立時の加盟校は、東京外國語學校、東京帝国大学、早稲田大学、東京商科大学、明治大学、東京高等師範学校、東京高等工業学校の7校であった。

●宮越健太郎教授略歴

明治18年1月4日新潟県に生まれる。1905年(明治38)7月東京外國語學校卒業。在学中、日露戦争に通訳として従軍した。1907年、同校講師に就任し、助教授・教授を歴任し1945年退官。在学中は覇業レースS組の選手として活躍し、着任後は端艇部部長に就任した。

宮越健太郎先生(昭和25年頃)

艇庫と艇番

艇庫とはボートをしまう為の倉庫であり、ボート競技には欠かせないものであった。外語では1900年(明治33)、端艇部の創設と同時に向島に艇庫を所有した。1906年には艇庫の改築(又は新築)が行われ、1930年(昭和5)には艇庫2階に合宿所が設置された。現在の合宿所がある戸田漕艇場は、1937年オリンピック東京大会の開催に向け整備された。この時、外語も土地を取得し、戦後の1952年、戸田合宿所が完成し、向島から移転した。その後、度々増改築が行われ、1991年(平成3)現在の合宿所が完成した。

また艇庫には艇番と呼ばれる番人が置かれた。向島の外語艇庫には「杉新」と呼ばれボートマンに愛された杉田新太郎艇番がいた。外語の艇庫ができて以来約40年艇番を務め、「隅田川の主」とも称された。1936年には慰労会も開催された。

杉田艇番慰労会(昭和11年)

杉田艇番夫妻(昭和11年頃)

埼玉　戸田合宿所工事(1991年)

埼玉　戸田艇庫(1961年頃)

東京・北区　西ヶ原キャンパス航空写真

東京・千代田区　神田錦町校舎

東京・墨田区　向島艇庫　艇庫前での漕法研究(1942年)

艇友会の発足

昭和期に入ると、選手権大会に臨む端艇部の強化支援を行うため、1931年(昭和6)、従来、端艇部を支援してきた後援部の機能を強化し、「東京外國語學校艇友會」(以下、艇友会)が発足する。艇友会は「東京外國語學校艇友會會則」第2条において「本會ハ會員相互ノ親睦ヲ敦フシ且ツ漕艇ヲ通ジテ運動精神ノ滋養助長ヲ圖リ以テ東京外國語學校端艇部ノ健全ナル發達ニ資スルヲ以テ目的トス」を掲げ、端艇部の支援に当たった。同年4月1日、艇友会は会報第一号『東京外語艇友會々報』を発行する。『東京外語艇友會々報』は、翌年、紙面を刷新し『コンコルディア』と名称を変更して、今日に至るまで、端艇部の近況を紹介する会報として継続的に発行されている。なお、コンコルディアの名称は1921年(大正10)に完成したエイト(8人の漕手と1人の舵手が乗る種目)の新艇に由来する。この名称は艇友会の初代会長であり、東京外國語學校教授であった田代光雄教授が名付けた。

昭和初期、部員不足による低迷も見られたが、1938年(昭和13)には舵手付きペアの種目で、全日本選手権競漕で全国制覇を果たした。

トピック　コンコルディア

『東京外語艇友会会報』、『コンコルディア』は艇友会の会報で、各時代の端艇部の近況を伝える貴重な資料である。紙面には端艇部のレース戦績や合宿・練習の様子についての記事の他、現役部員を叱咤激励するOBの投稿記事が掲載された。また、端艇部だけでなく外語の近況をも伝え、在校生・卒業生をつなぐ伝統ある機関紙として発刊され続けている。

コンコルディア全体図

トピック　小さなコンコルディア

「小さなコンコルディア」艇友会では戦争の時代にあっても、会員の相互連携を図ることを目指した。会報『コンコルディア』は37号をもって一時停刊となったが、ガリ版刷りの『小さなコンコルディア』が1944年2月29日から1946年9月まで、号外を含め全7号が発刊され、戦地に散らばった会員との通信が図られた。

『コンコルディア』第37号(1944年)には「新卒業生並出陣學徒」として、出征した学生が挙げられている。

小さなコンコルディア

戦時下の端艇部

戦争が激しさを増す中、學校においては軍事教練が必修となり、端艇部も転換期を迎える。1940年、端艇部の母体でもある校友會は、東京外國語學校報國團へ改編される。これと同時に端艇部は報國團鍛錬部端艇班となった。戦争の時代にあっても、端艇部の活動は継続され、1942年には全國高専漕艇選手権大会エイト(8人漕ぎ)において初優勝を果たした。

しかし、1943年に入ると、状況は一変する。同年5月のインターカレッジは開催されたが、7月21日には前年、外語が優勝を果たした全國高専漕艇選手権大会のレース無期延期命令が文部省より通達された。10月には文系学生に対する徴兵猶予が停止され、11月、多くの学生が「学徒出陣」により戦地に赴く事となった。

対抗クルー(昭和18年)

出征艇友壮行会(昭和13年)

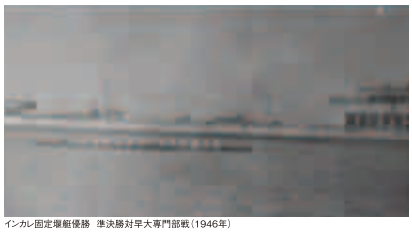
全日本付きペア優勝(昭和13年)

全国高専漕艇選手権大会に臨む　戸田合宿所前(1942年)

覇業レース(1943年) 戦前最後の学内競漕大会

戦後の復活

敗戦直後の1945年10月、日本漕艇協会はボート競技の復興に向け活動を再開した。同年11月10日、「ボートレース復活祭」と銘打ちレースが開催された。これに本学の端艇部は出漕し、翌年の「復活第一回」インターカレッジでは種目固定席艇で、1948年の全日本選手権では種目フォアで優勝を果たした。また、1947年3月には艇友会の活動も本格的に再開する。従来、艇友会は校内組織として活動をしていたが、戦後の混乱により学校当局からの支援が得られぬ状況に鑑み、艇友会は校外OBを中心とした組織に再編整備された。


インカレ固定席艇優勝　準決勝対早大専門部戦（1946年）

戦後の展開

戦後、1957年東京工業大学との工大戦が復活すると、翌年には東京商船大学を加えた三大学レガッタ(別名TFMレガッタ。Tは東工大、Fは外語大、Mは商船大を意味。)が開催される。この大会は後年(1966年)に東京教育大学と防衛大学校の2校を加え、五大学レガッタ(競漕大会)として発展し、今日まで続いている。

1960年、端艇部に女子部が発足し、1963-64年の関東女子インカレで優勝するなどの活躍が見られた。本学の学生数全体に占める女子学生比率は、1970年代に急速に高まり、1983年には男女比が逆転するまでに至る。こうした男女比の変化は、端艇部にも男子選手の不足と女子学生の増加という形で現れ、戦後の一つの特徴となった。

端艇部では五大学レガッタ、全日本選手権をはじめ、右表にみられる戦績を収め、今日に至っている。

全日本優勝メンバー（昭和23年）

五大学エイト優勝（昭和55年）

獲得優勝カップ（昭和34年）

トピック　食糧難

戦時中・戦後直後の食糧難の中、ボートを漕ぐ学生たちは「腹減らし」と罵声を浴びせられることもあった。また、学生らは艇庫周囲に畑を作り、食糧の確保に勤しんだ。

浅野紀男（左）と鈴坂一博（昭和36年）

1946年	インターカレッジ 固定席艇　優勝
1948年	全日本選手権 舵手付フォア　優勝
1953年	全日本選手権 舵手付フォア　優勝
1959年	全日本選手権 舵手付フォア　優勝
	全日本選手権 舵手付フォア　優勝
	三大学エイト　優勝
	ジュニア・インターカレッジ 舵手付フォア　優勝
1962年	三大学エイト　優勝
	ジュニア・オープンレース・エイト　優勝
1963年	全日本選手権 舵手付フォア　優勝
	関東女子インカレ　優勝
1964年	関東女子インカレ　優勝
	三大学エイト　優勝
1967年	全日本選手権 エイト　3位
	五大学エイト　優勝
1968年	五大学エイト　優勝
1969年	五大学エイト　優勝
1970年	五大学エイト　優勝
1971年	全日本ジュニア・ダブルスカル　優勝
	全日本選手権 舵手付フォア　優勝
1977年	全日本大学選手権 ダブルスカル　優勝
1980年	五大学エイト　優勝
1990年	全日本選手権 舵手付フォア　優勝
2000年	全日本軽量級選手権 女子舵手付フォア　優勝
2003年	五大学エイト　優勝
2005年	全日本選手権 女子シングルスカル　優勝
2011年	五大学エイト　優勝

外語とオリンピック

■戦　績

1960年(昭和35)　ローマ五輪(舵手付フォア)代表決定戦　準決勝で敗退
1964年(昭和39)　東京五輪(舵手無フォア)全日本選手権　準決勝で敗退

東京外国語大学東京外国語大学がオリンピック出場に手をかけた年がある。1959年全日本選手権舵手付フォア、舵手無フォアで優勝した外語はこの優勝を足掛かりに翌年のローマオリンピック代表を目指した。1960年5月の代表決定戦、前評判では前年全日本優勝の外語が本命とされていた。しかし、結果は準決勝でまさかの敗北を喫し、惜しくもオリンピック出場を逃してしまった。

4年後、再度、オリンピック出場を目指した外語は種目を舵手無フォアに絞り代表選出を狙った。しかし、敗者復活戦を経て勝ち上がった準決勝で再度敗北を喫し、外語のオリンピック出場の道は絶たれてしまう。

ローマ五輪挑戦フォア（昭和35年）

五大学レガッタ（昭和49年）

■「オリンピックうらばなし」

ただし、この東京オリンピックには選手としての出場はならなかったが、国際審判員などの競技役員、審判艇を運転する競技補助員、取材通訳と外語のOB・学生たちが参加した。

ローマ五輪挑戦フォア（昭和35年）

東京オリンピック審判服

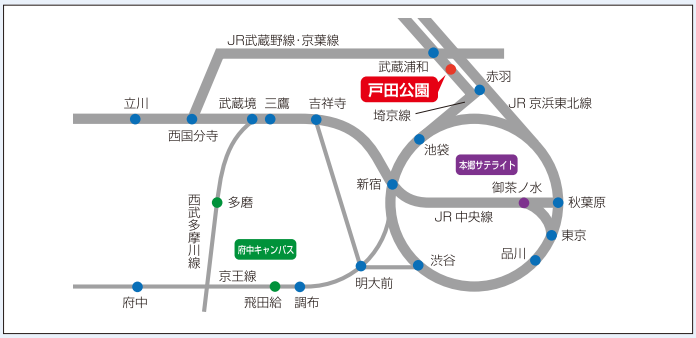
東京オリンピック参加賞

第100回 学内競漕大会

2013年5月29日(水)

於:戸田オリンピックボートコース

主催／東京外国語大学
後援／東京外国語大学端艇部・東京外語艇友会



戸田公園駅までのアクセス

- 西武多摩川線　多磨駅より(国分寺経由) 1時間15分
- 西武多摩川線　多磨駅より(新宿経由) 1時間5分
- JR新宿駅よりJR埼京線　25分

端艇部寄贈資料について

2012年(平成24)、文書館は東京外語艇友会より資料群を寄贈頂きました。資料群は『外語ボート70年史』(1977年)・『外語ボート100年』(2001年)をはじめとする端艇部の年史編纂の際に収集されたもので、1900年に創立され本学でも最古参の部活の一つである端艇部の歴史を伝える貴重な資料群です。

資料群は元々、学内競漕大会の会場、戸田オリンピックボートコースにある端艇部合宿所に保管されていました。昨夏、資料群を合宿所から文書館に移管し、簡易保存措置を講じた上で、資料群の整理・目録作成を行いました。現在資料群は文書館の収蔵庫に大事に保管されています。

資料群には、今回の展示で紹介致しました資料のほかにも、多数の貴重な資料が含まれています。また、現状未整理の段階ではありますが8500点を超す写真が含まれ、各時代のボート競技の様子を克明に伝えています。

文書館ではそれら資料の整理・目録化を進めるとともに、閲覧・利用ができるよう、その体制整備を進めています。

なお、本パンフレット作成にあたっては、東京外語艇友会からの全面協力を得ました。記して感謝申し上げます。

文書館への資料寄贈のお願い

文書館では本学に関わる資料を収集しています。
在学中の教科書・ノート、事務書類、部活動の記録など御手持の資料で、
文書館に御寄贈頂けるものございましたら、下記連絡先まで御一報下さい。

《収集資料の一例》

学生時代のノートや教科書、外語祭・部活動の記録、
ゼミ・留学の写真 etc.

※なお、同一の資料を既に収蔵している場合等、収蔵スペースの関係上ご遠慮させて頂く場合がございます。ご了承下さい。

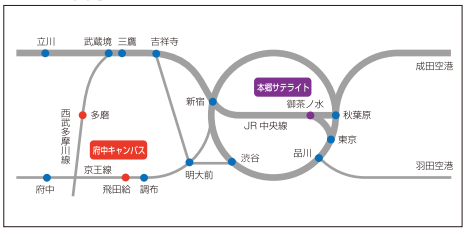
TUFS ARCHIVES

東京外国語大学文書館

〒183-8534　東京都府中市朝日町3-11-1　研究講義棟600室

TEL.042-330-5842
e-mail:tufsarchives@tufs.ac.jp
http://www.tufs.ac.jp/common/archives/

■交通案内



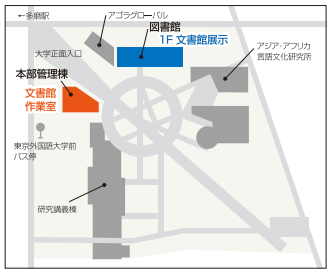
西武多摩川線

●「多磨」駅より …… 徒歩5分

JR中央線「武蔵境」駅乗り換え
(JR新宿 ⟷ 多摩 …… 約40分)

京王線

●「飛田給」駅北口より … 約10分

京王バス「多磨駅」行きに乗り換え
「東京外国語大学前」下車

■構内案内図